

## 「自学力の育成」 ～ループリック評価に基づいた授業力の向上～

今年度も、広島大学大学院 教育学研究科教育学講座 准教授 吉田 成章 先生をお迎えし、7月13日(木)に八幡小学校 谷教諭の3・4年生(複式)授業提案により、小中合同授業研究会を実施することができました。



八幡小学校 3・4年生 算数科研究授業  
授業者 谷 美保子 教諭  
第3学年「わり算を考えよう」  
第4学年「四角形を調べよう」  
指導助言 広島大学大学院 教育学研究科  
教育学講座  
准教授 吉田 成章 先生

### 授業者から

今回は「ループリックに基づいた授業づくり」をテーマに「つなぎ発言を意識して、根拠を示しながら、相手が理解できるように発言できる。」(③ーレベル4)を目指し授業を行った。3年生は、余りの処理について今回の授業を通し、対話により比較検討しながら理解を深めることができた。4年生は対角線に着目させ、既習の定義や性質に照らしながら、算数用語を使って根拠を示し、対話によって図形を判別することができた。



### 【グループ協議での意見・感想】

- ・3年生は生活場面からの課題提示であり、意欲的に取り組むことができていた。自力解決の前に、前時との違いを明らかにして課題に取り組んでいたのがよい。
- ・線分図を書かせて課題解決の手立てとしていたのがよい。
- ・「絵図と関連付けて根拠を示して説明する」という自学ループリックの設定は適切であった。
- ・あまりの処理に着目させ「割る」という意味の理解を深める授業であった。
- ・4年生は難解な問題であった。
- ・対話力をつけるのであれば、机を横並びではなく話し合いのしやすい形態にするとよい。
- ・複式の場合は、学習リーダーをしっかりと育てる必要がある。

## 【吉田先生の指導講話から】～さらなる自学力の育成～

### 1 自学力が発揮されるのは「主体が発動」したとき

自学力が発揮されているのはどんな瞬間か。子どもたちの姿をよく観察していると、それは「主体が発動したとき」である。例えば具体的には、算数科の逆思考を伴う課題にあっている場面で、順思考と逆思考がぶつかり合い、「あっ」とひらめいた時、教室言語ではない言葉が出る。今回の授業で言えば3年生のIくんが「それは詐欺になる。」と発言したあの瞬間、主体が発動したと見取ることができる。それをうまく評価して、思考の深まりを認める。



### 2 「対話」の評価では、下から押し上げる評価を

1時間に1回必ず名前を挙げて、レベル1からレベル2へ上げる願いを込めて、子どもの姿を意味づける肯定的な評価をしていく。

### 3 課題の選択—進度・深度の幅を見極めて設定する

課題を生活文脈から設定すれば、児童の実態にあった教材の山場をつくることになる。ただし、教科書の数字には意味がある。今回の3年生の場合は発表に選択肢を設けると「言えそうだけど言えない」児童の手立てとなる。



### 4 リーダーの育成ではなく、フォロアーの育成が大切

支えるものを育てる。3年生の授業ではIくんが「Wさんの考えが聞きたい。」と発言した。それが学びを主体的に進めることにつながった。4年生の授業では、Mさんの「先生、どちらもひし形じゃないんじゃない？」という発言が「主体の発動」と言える。それをみんなの学びにつなげていきたい。それには、フォロアーの育成が必要。また、指導者が「自分たちで学びを進めていたね。先生はみんなに支えられたよ。」といった評価をしっかり入れることでフォロアーが育つ。子どもたちの相互評価を付箋で入れていくといった活動も効果的である。

### 5 ルーブリックについて

ルーブリックに照らすということは、目標に準拠した姿を目指すということである。よってその目標を間違えると教育を間違えることになる。具体的にどの姿をどう評価するかは、子ども一人一人に照らしながら、作り変えていくという作業が必要になってくる。

#### まとめ

吉田准教授には「〇〇君が…」 「〇〇さんが…」 「〇〇先生が…」 と名前を、その瞬間、瞬間の児童の観察から児童の思考を分析して頂きました。私たちが目指す自学力を「主体が発動したとき」と名付けられ、まさに授業での子供の姿、教師の姿で「主体的な学び」を共有することができました。

「品の滝のやまめまつり」の問題に引き込まれ、教師の肯定的評価によってぐんぐん授業に引き込まれ全員で課題解決していった3年生。

複式上学年。「先生にいつ来てもらえるか」わからない状況の中で対角線の特徴を根拠に4人が学びをつないだ4年生。

① 充実感 ② 達成感 ③ 自己有用感 ④ 一体感 の手応え感覚のある授業でした。

